

仙台若宮丸漂民のアレウト列島漂泊

木 崎 良 平

はじめに

寛政5癸丑年11月29日（ロシア暦1793年12月20日、新暦1793年12月31日）、仙台石巻の米沢屋平之丞持船若宮丸は岩城領塩屋崎沖で遭難した。乗組員は沖船頭の平兵衛以下16名であった。

かれらは太平洋を漂流すること5か月余り、翌寅年5月10日アレウト列島のとある島に漂着した。その後、かれらは当時ロシア人のアレウト経営基地のあったナアツカに到着する。ここに滞留すること1か年ほど、かれらは卯年4月3日ロシア船でナアツカ出航、同年6月28日オホーツクに到着した。

こうした仙台漂民のアレウト列島漂泊について、かれらが経由したナアツカとはアツカ島であったとする説が近年唱えられている。⁽¹⁾ 本稿は、このアツカ島説の当否を中心に、仙台漂民のアレウト列島漂泊の経緯を明らかにしようとしたものである。

さて、若宮丸乗組員16名のうち水主の津太夫ら4名は、ロシア第2回遣日使節レザノフに伴なわれて文化元年9月6日（ロシア暦1804年9月27日、新暦1804年10月9日）長崎港外伊王崎に帰着した。翌文化2年12月に江戸仙台藩邸に到着した漂民4名を審問し、かれらの言うところをまとめたものが、仙台藩医大槻玄沢の『環海異聞』15巻（文化4年初夏成）である。仙台漂民に関するもっとも精細な、かつ基本的史料である。

本稿は、まずはこの『環海異聞』の仙台漂民アレウト列島漂泊についての記事を再録し、もってその出発点としたい。⁽²⁾ ついで、『環海異聞』を読

む場合の注意すべき点について述べ、第三にはかれらが滞留したナアツカとは何処であったかという問題に焦点をあてながら、仙台漂民のアレウト列島漂泊の経緯を明らかにすることとする。

1. 仙台漂民アレウト列島漂泊記事

まず、『環海異聞』巻1に見られる仙台漂民のアレウト列島漂着の記事である。

寅五月十日朝五半頃、もやはれ候て、目の前にあたり不意に丑寅の方に、雪ふり候高山を近く見附申候。仙台磐井郡の駒ヶ嶽程の山かと見受申候。其島山の卯辰の方岩根え舟流れ寄り候所、一体絶壁にて岩石きり立て其嶮き出崎の所にて、中々登り可申体にも無御座候間、本舟をば岩の辺岩間え鉄錨を下し、端舟を卸し十六人ともに晝七つ時頃、小浜ある所へ上陸仕候。

近辺に草木とてもなく人家もなく候間、尋ね廻り高みの所より最初鉄錨を掛置候本舟の辺を見下し候処、本舟はもはや波に打砕かれ流沈み候哉相見へ不申候。

此処に十日斗り逗留、雪を踏分々々、又神闕を上げ候て島か国か人里の有か無か方角は何れの方かと三度迄伺ひ候処、此所人の住島にて戌亥の方五十里、又五十五里と神闕下り候間、又脚舟を卸し候て初め本舟をかけ候山の出先きを回りて、地方に添ひ奥の方へ二日程島の端てをめぐり、乾の方を尋ね申候。

次に、仙台漂民が人家のあるところに至ったあたりの記事である。

六月五日、烟り立候所を見付候間、人家と相察し舟を近寄せ候へば、人影三人程相見得申候間、皆々悦、早速上陸仕度奉存候得共、此辺上り場不宜、向ふに出先きの所見付、其出先を廻り砂浜ある所へ漕寄せ候へば、初め見かけ候三人の外に都合三十人程の人数参候。彼者ともは初めより拙者共を漂流の者と心得候と相見へ、彼者共打寄り暫時に引上げ呉申候。丑十一月より寅の六月迄、海上漂流の間八ヶ月にして初めて上陸仕候。

此島の名をオンデレイツケヲストロと申候。是はオロシイアより名付候名のよし。元の名は何と申候や。オロシイア辞にて島の事をオストロと申候。島人の総名をアリヲットクと申候。

伊勢光太夫話に、アミシャーツカの北にアンデレイスカと云所あり。島の事はオストロフといふ。島人の総名をアレヲツカといふとぞ。是同じ名なるべし。何れが正名なるや。

第三に、仙台漂民はこの所へ来着したロシア人に連れられ、ロシア人のアレウト経営基地のあるナアツカという所へ至るあたりの記事である。

六月八日、船頭平兵衛、此所にて病死仕候。同十二日、島人とは総体様子替り年頃五十余に見へ候者、皮舟に乗り皮の衣服にて此所に着し上陸す。外に島人五人都合十人斗参り候。是は警固の為と見得候。拙者共漂着の事、此所よりオロシイア役所御座候所え注進いたし候故、吟味のため参候事に追々相察し申候。同十三日、朝五時頃より南風吹、右オロシイ人指図致し拙者共乗来り候脚船を島人に卸させ申候て、これに乗候様仕形いたし、右人々も一同に乗組出船仕り、同夜四つ時頃、同島の内、丑寅の方にあたり候小湊え着岸す。此所ナアツカと申所の由、やはりオンデレイツケの内にてヲロシヤ本国よりの出張所有之、

小湊と相見へ候。出船の場所より彼国の里法にて五十里程有之。最初漂着の所よりは、此所迄百里程と聞へ申候。

此所には、三、四百石積位のヲロシヤ舟三十余人乗組参居り、陸にも三、四十人斗居候様子に見へ申候。魯西亜本国より役人出張り致し参り居候て、三年めに交代致し候由。

此島の中へ五月十日初て上陸仕候へども人里無之場所故、又舟を乗廻し六月五日に至り、漸々島人に出会、世話を受け、其所に滞留九日目にて此ナアツカへ参り申候。陸へ上り候より三十日程に相成、此所に足をとどめ候事に相成、凡一ヶ年程同所に罷在候。

此島オロシヤ本領地方よりは、東の方にあたる北アメリカに属し申候由。

島の広さ何程御座候哉、知れ不申候。此辺前後大小諸島あまた相並び居候趣に御座候。ナアツカは此中の小湊と相見へ申候。

猫のごとき獣、啼声並に尾も狐に似申候。毛は赤く見へ、山に住申候を見かけ申候。島人之をシセツと申候。

光太夫曰、狐をオロシイアにてリシツといふと。是又やはり狐なるべきか。

第四に、仙台漂民は卯年春ナアツカからオホーツクへ送られるが、このナアツカ出帆あたりの記事である。〔『環海異聞』巻2〕

翌年乙卯春の末に至り、船主イワノイチ=ガラロフ申聞候は、平日魚類斗り給候所に居候ては、各身分にも宜く有間敷候間、二年づゝにて本国より交代致し候所へ連れ渡り可申由にて出立の用意など仕らせ、拙者共十五人え革の着服を与へ申候。即もらひ受着用仕、何れも右船に乗組、四月三日と覚へ此島出帆仕候。

此島へ漂着せしは寅の六月にて、当卯の四月迄十一ヶ月に相成申候。

取納候皮類一艘に積受候程、相集候所にて致

帰帆候よし。此度の帰帆一年早く御座候よし。是は漂流人連渡り候為、すすみ候て出立と承申候。

日本の寛政三年辛亥の年より此船在留のよし。此とし迄四年めと奉存候。

ガラロフ、年六十歳に近く相見へ申候。生れはゲライカといふ所の由。妻も連れ渡り居申候。在留中に子一人出生のよし。妻の年は十七歳と承り申候。

第五に、ナアツカ出帆後、サンバシヨウおよびカミセイツカを経てオホーツクに至るあたりの記事である。

四月廿七日頃、サンバシヨウと申島へ晝四時頃着。私共上陸不仕船に罷在候。

此島、ナアツカより北の方にあたり、オロシイア里数四百里程ありといへり。

四月三日と覚ナアツカ出帆の後十日斗走り候所、海水の氷うづ高く成候所へ乗りあげ申候。此海は北亜墨利加の方角にて、サンバシヨウを三百里北の方に乗り落す。此所より二日程乗り戻しサンバシヨウえ着船す。出帆より日数廿三、四日を経たり。

サンバシヨウ用事相仕廻、出船して五月十一日、十二日頃、カミセイツカと申島へ着仕候。拙者ども上陸不仕候。

此島、先年勢州光太夫等漂着仕候よし追々承り申候。

ナアツカより此所迄直渡りヲロシア里数にて九百里と申候。併此度はナアツカよりサンバシヨウへ廻り、此島へ三角形に参り候事ゆへ、是迄の里数何程に成候や承りも仕らず候。

カミセイツカよりカミシヤーツカと申す地方の湊へは、海上千四百里と承り申候。カミシヤーツカは陸地東北の端にある湊なり。

此所二日程逗留、用事相済出帆して六月廿八日オホーツカと申す大湊へ着船す。カミセイツカより此湊への里数承り申さず候。但四十

余日経候て着岸仕候。

ナアツカよりオホーツカへ直渡り海上彼里数三千五百里と承り申候。サンバシヨウ、カミセイツカ両所へ立寄り此湊へ参着の事故、凡四千里もあるべきかと奉存候。

寛政七年乙卯六月廿八日、オホーツカと申湊へ着岸す。

ナアツカより此湊迄、大凡彼里数にて三千八百七十里程、船を寄候アミセイツカよりは未申、又申酉と走り申候。カミツヤーツカと申す湊の岬をば右に見て此所へ着岸仕候。

2.『環海異聞』における日付その他

さて、本稿の目的は以上に掲げた『環海異聞』の記述を中心として、仙台漂民のアレウト列島漂泊経緯を明らかにすることであるが、その場合、まず注意すべき点は『環海異聞』における年月日の表記の仕方である。

一般に漂流記における日付は、船が遭難した年については当然のことながら日本暦で示される。遭難が年末であれば、漂民が所持していたであろうその翌年の日本暦によって年月日が示される。以後は漂着地あるいは救助された船の属する国の暦で示されるのが一般である。遭難者の中で運よく帰国できた者があった場合、その帰国前後の頃からは再び日本暦で示される。

たとえば、天明2年～寛政4年ロシアへ漂流した伊勢神昌丸漂民の場合である。帰国した船頭大黒屋光太夫（幸太夫）と水主磯吉に対する調書『幸太夫・磯吉取糺の事』には次のようにある。³⁾

天明四辰年より日本之暦無之候に付、魯西亜国之月日相用申候。

そして、寛政4年の根室帰着の頃からは、それまでのロシア暦ではなく再び日本暦が用いられている。

しかし、『環海異聞』の場合は、これらの漂流

記とは異なっている。文化二年四月付で帰国仙台漂民4名が長崎奉行所に差出した『漂流人申上候異国様子書』には、次のようにある。⁴⁾

年月之儀ハおろしやの年月ニハ無之、漂流人共心覚への年月に有之。尤、満月の比を月中に致しかぞへ候事ゆへ、違候儀も可有之由に御座候。

この『異国様子書』およびこれと同時に漂民が長崎奉行所へ差出した『魯西亜国へ漂流人四人口書』⁵⁾の日付と『環海異聞』の日付とはほぼ一致しているので、『環海異聞』の漂民ロシア滞留中の日付も漂民心覚えの日本暦とみて差支えないであろう。

仙台漂民のこの年月日表記の仕方は、天保9年～天保14年、オアフ島・オホーツク・シトカ漂泊の越中長者丸漂民の表記法と同じである。長者丸漂流記『時規物語』⁶⁾のはし書には次のようにある。

編中に載るところの年月は本邦の暦を用るなり。漂民いふ月の盈虚を以て晦朔を検し、又、三年に一閏を加て、何年何月と算したり。

もっとも、『環海異聞』には閏月の記述はない。仙台漂民漂泊中の日本暦では、寛政6年に閏11月、寛政9年に閏7月、寛政11年に閏4月、享和3年に閏正月があったが、漂民がこれら閏月をどう処理したかは不明である。また、漂民は実際の日本暦における各月の大小も知らなかったから、『環海異聞』の漂民心覚えの日本暦の扱いには十分な注意が必要である。

なお、『環海異聞』の日付は、すべて漂民心覚えの日本暦で示されているとは限らない。『時規物語』と同様に、⁷⁾ 時にロシア暦で示されているところもある。たとえば、帰国漂民がカムチャツカのペテロパウロフスクに寄港した際の日付である。『環海異聞』巻13には次のようにある。

(文化元年) 子の年七月三日、カミシヤーツカえ着。

この7月3日はロシア暦1804年7月3日である。新暦(グレゴリー暦)ならば7月15日、日本暦なら6月9日となる。

その上、厄介なことに『環海異聞』には、漂民の話したところの他に編者大槻玄沢の註記がある。漂民のペテロパウロフスク寄港の日付について言うならば、玄沢は次のように註記している。

『海路記』を按するに、彼八月三日我六月廿八日カミシヤーツカ着と見ゆ。『和解書上』には彼暦一千八百四年九月三日、当子七月廿九日カミシヤーツカに至るとあり。茂質(玄沢)按、彼九月は八月の和解の誤り、我七月は六月の誤りなるべし。

実際は、『海路記』には月名が付されていないのに、玄沢はこれを8月3日と考え、しかもこの8月3日をグレゴリー暦と思い、これを日本暦6月28日に換算した。『和解書上』は、ロシア暦7月3日とすべきところを9月3日と誤写し、それをグレゴリー暦として日本暦に換算したのである。⁸⁾

『環海異聞』中の大槻玄沢の註記には、時にこのような間違いもあるので、同書を読む場合には、漂民の言うところと玄沢の註記とを十分区別する必要がある。

さらに、前章で掲げた『環海異聞』の記事からも分るように、仙台漂民漂泊の記事は、まず漂泊の大綱を示し、それに関しての玄沢の質問に漂民が答えたところが列挙されているから、時に叙述の重複があり、また前後矛盾する記事もある。

たとえば、前章で挙げた第一記事に「寅五月十日小浜ある所へ上陸仕候」とあるが、第二記事には「丑十一月より寅の六月迄、海上漂流の間八ヶ月にして初めて上陸仕候」とある。第三記事には「此島の中へ五月十日初て上陸仕候へども人里無之場所故、又舟を乗廻し六月五日に至り漸々島人に出会」とあり、第四記事には「此島へ漂着せしは寅の六月にて、当卯の四月迄十一ヶ月に相成申候」とある。

また、第五記事に「ナアツカよりオホーツカへ直渡り海上彼里数三千五百里と承り申候」という箇所と、「ナアツカより此湊迄、大凡彼里数にて三千八百七十里程」という箇所がある。

『環海異聞』を読む場合には、以上のような点に十分留意する必要がある。

3. 仙台漂民のアレウト列島漂泊

まず、第一章で掲げた『環海異聞』の記事に見える島名・地名について比定しておこう。漂民が最初に上陸したオンデレイツケヲストロとは、アレウト列島中のアンドレヤノフスキー諸島のことであることは容易に推定できる。ヲストロはロシア語の島（ostrov）のこと。

次に、漂民が滞留したナアツカからオホーツカへの航海途上立ち寄ったサンバシヨウであるが、これは帰国漂民の「口書」⁹⁾ にサンパメウとあることから分るように、ベーリング海の真ん中にあるプリビロフ諸島中のサン・パウエル島と思われる。

第三に、同じく漂民が立ち寄ったカミセイツカあるいはアミセイツカであるが、これは伊勢漂民が滞留したクリシー群島中のアムチトカ島である。

第四に、カミシヤーツカはカムチャツカの対音で、その湊とはウスチ-カムチャツクのことと思われる。ただし、その岬とはロパトカ岬のことであろう。

問題は漂民が滞留したナアツカがどこかということである。これについて、1944年に『北門叢書』の一冊として『環海異聞』を刊行した大友喜作は、東部アレウト列島のリシー諸島中のウナラシカ島と考えた。¹⁰⁾ これに対し、1986年『北東アジア民族学史の研究』を著した加藤九祚は、それは中部アレウト列島のアンドレヤノフスキー諸島中のアツカ島であると唱えた。¹¹⁾

その理由は次の如くである。まず、本稿第一章に掲げた『環海異聞』の第三記事中の「此所ナアツカと申所、出船の場所より彼国の里法にて五十里程有之。最初漂着の所よりは此所迄百里程と聞へ申候。」に注目し、仙台漂民の漂着した島は、長さ百里ほどの島で仙台の駒ヶ嶽（栗駒山、1628 m）ほどの高い山（コロヴィン山、約1500 m）があるアンドレヤノフスキー諸島中のアツカ島で、はるかにアラスカ半島寄りのリシー諸島中のウナラシカ島ではない。

第二に、アツカ島がナアツカと記されたわけは、漂民がアツカという島名をロシア語の前置詞「ナ」とともに覚えたためである。ロシア語では、地名、とりわけ島や半島などの名称に必ず「ナ」を着ける。漂民らが前置詞と名詞を一緒に覚えたことは当然である。『環海異聞』巻8にも次のようにある。

天、ナネーボ、ナ、といふ事を上に付る辞多し。縦令ば天は子ーボなるをナ子ーボといひ、地はジラムなるをナジラム、島はオストロなるをナオストロといふ。漂客等初めてつきたる島は「アツカ」なれどもナアツカと稱するの類なり。

なるほど、仙台漂民の漂着地点と、漂民が島民と出会った地点、漂民が連れて行かれたナアツカといふ小湊が同じ島にあると假定した場合、このアツカ島説は妥当のように思える。

しかし、前掲第五記事によれば、「ナアツカより此所（アムチトカ島）迄直渡りヲロシヤ里数にて九百里と申候。カミセイツカ（アムチトカ）よりカミシヤーツカ（カムチャツカ）と申す地方の湊へは、海上千四百里と承り申候。」とある。

アムチトカ〜ウスチ-カムチャツク間の距離1400里というのは、伊勢漂民の漂流記『北槎聞略』¹²⁾などに示されているものと一致するから、ナアツカ〜アムチトカ間が900里という記述も一概に否定できない。実際地図の上で、アムチトカ〜ウスチ-

カムチャックを1400里とした場合、アムチトカ〜アツカの距離は約300里で、ナアツカがアツカ島であるとするのは、アムチトカ島に近過ぎる。

アムチトカ島から900里離れた島というのは、ねしろ約1100里離れたウナラシカ島を思わせる。なお、ウナラシカ〜サンパヴェルは約500里で『環海異聞』の示す400里に近い。アツカ〜サンパヴェルは約800里もある。

それに、仙台漂民が滞留した島がアツカ島であったとした場合、かれらをオホーツクに連れて行くのに、なぜ遙か北東のサンパヴェル島に寄港、ついでアムチトカ島という鋭角三角形の航路をとったのかも極めて疑問である。漂民らが「ナアツカよりサンバシヨウへ廻り此島（アムチトカ島）へ三角形に参り候」と言う時、ウナラシカ→サンパヴェル→アムチトカというのが自然である。

また、アツカ島説をとる加藤九祚は、漂民らがサンパヴェルに向う際ウナラシカに立寄った可能性も十分あるとし、漂民らを世話したイワノイチ＝ガラロフ（エウストラト＝イヴァノヴィチ＝デラロフ）はこの島に妻をおいていたとも考えられるとする。しかし、漂民らがウナラシカ島に立寄ったとすれば、アレウト列島開拓の重要な基地のあったこの島の名前を漂民らが全く耳にしなかったというのも不思議である。

なお、加藤は漂民らがアムチトカ島からオホーツクに渡る途中ウスチーカムチャックに寄港、ここに二日間滞留したとするが、⁹³第一章で示した『環海異聞』の記事をよく読めば、これが間違いであることは明瞭である。第五記事中の「此所二日程逗留」の此所とは、カミセイツカ（アムチトカ）のことでありカミシヤーツカ（ウスチーカムチャック）のことではない。かれらはアムチトカ島を出帆し、「カミシヤーツカと申す湊の岬（ロパトカ岬）をば右に見て此所（オホーツク）へ着岸」したのである。

『異国様子書』にも次の如くある。⁹⁴

此島（アムチトカ島）よりヲホーツカへ参候海上よりカムシヤツカの出崎（ロパトカ岬）も遙に見申候。

第二に、漂民らが島の名前を前置詞「ナ」と一緒に覚えたという点であるが、『環海異聞』巻8の「ナ、といふ事を上に付る辞多し云々」という記事は、編者大槻玄沢の註記であり漂民の証言ではない。

『環海異聞』言語篇中で、漂民が前置詞と名詞を一緒に覚え帰ったことを示す例は、「天、ナ子ーボ」と「地、ナジムラ」だけであり、サンパヴェルもアミセイツカもナサンバシヨウとかナアミセイツカとは記されていない。なぜ、アツカ島だけに「ナ」が付けられたのか、不思議である。⁹⁵ ナアツカとは、ウナラシカの訛音であったとも考えられる。語頭のウが脱落し、ラシカのlaのlが消え、シとツが交替したことも想像できる。

なお、当時、狐がいたのはアンドレヤノフスキー諸島ではアツカ島だけであったとしても、ウナラシカ島の属するリシー（狐）諸島には、その名の示すように狐が多くいたので、『環海異聞』のこの記事をもって、仙台漂民が漂着した島をアツカ島であったとすることはできない。

もとに戻って、仙台漂民漂着に関する『環海異聞』の記事を見てみよう。そこに記されている「島」という語が単数ではなく複数でもあることは、「此島の名をオンデレイツケヲストロ⁹⁶（アンドレヤノフスキー諸島）と申候」の箇所からでも明瞭である。したがって、仙台漂民は最初漂着した島からアレウト列島の島々を乾の方角へ、上陸後十日ほどのち（5月20日）より6月5日まで、島々伝いに奥の方へ探索したとも読める。漂着した島と住民と出会った島、またナアツカが同一の島であったとは限らない。

また、最初上陸したところと住民と出会ったところとの距離が50里ほどというのは、漂民が神蘭によって示された50里もしくは55里と符合させて

いるとすれば、神蘭で示された50里は日本里法の50里であつたろうから、ロシア里法の約4倍の距離であり、¹¹⁾ そのまま信用することはできない。漂流記における年月日の表記と同様に、その度量衡の表記についても、それがどの国の単位によって示されているかは注意を要する。

なお、駒ヶ嶽ほどの高さの山とは、アツカ島のコロヴィン山とは限らず、中部・東部アレウト列島の島々には多くある。

おわりに

以上考察したところから仙台漂民のアレウト列島漂泊経緯を簡単にまとめれば次の如くであったと考えられる。

寛政6年5月10日（ロシア暦1794年5月27日、以下（ ）内はロシア暦）、アレウト列島アンドレヤノフスキー諸島の一島に漂着。10日ばかり滞留、端舟で奥の方北西へと向う。

6月5日（6月20日）島人アレウト族と出会い救助される。遭難してから足かけ8か月目。

6月13日（6月28日）来着したロシア人とともに北東に向いナアツカ（ウナラシカ）着。滞留すること足かけ12か月。（寛政6年は閏11月があった。『環海異聞』には11か月とある。）

寛政7年4月3日（1795年5月10日）ウナラシカ出帆。漂民を乗せたデラロフの船は、寛政3年から滞船していたというから、出帆まで「此とし迄四年め」ではなく、足かけ5年目。

4月27日（6月3日）頃、プリビロフ諸島中の聖パヴェル島寄港。ナアツカより北の方400里。4月3日より足かけ25日目。

5月11日（6月16日）頃、アムチトカ島着。二日ほど逗留。ナアツカより直渡り900里の島。

6月28日（8月1日）、オホーツク着。5月13日（6月18日）アムチトカ島出帆とすれば、足か

け45日目。ナアツカより直渡り3500里または3870里。

註

- (1) 加藤九祚『北東アジア民族学史の研究』、1986年、恒文社；同『初めて世界一周した日本人』、1993年、新潮選書、および山下恒夫『江戸漂流記総集第六巻付環海異聞解題』、1993年、日本評論社。
- (2) 本稿の『環海異聞』からの引用は、石井民司『漂流奇談全集』、明治33年、博文館、所収のものによる。
- (3) 石井民司『漂流奇談全集』、pp.269～282。
- (4) 松浦東溪『長崎古今集覧』下巻、（『長崎文献叢書』第2集第3、森永種夫校訂）昭和51年、長崎文献社、pp.224～234。
- (5) 『通航一覧』巻318、国書刊行会本、第8冊pp.157～166。
- (6) 『日本庶民生活史料集成』巻5、昭和43年、三一書房、pp.3～237。
- (7) 『時規物語』でも時にロシア暦による年月日表記などがある。
- (8) 仙台漂民持帰りの世界図にピョートル＝トルフェモヴィチ＝ゴロヴァチョフ海軍中尉が、漂民帰国航路とその日付を記した『海路図』の日付についての大槻玄沢の考察は、木崎「仙台若宮丸漂民の帰国航海日暦」（『立正史学』67、平成2年）参照。
- (9) 『魯西亜国へ漂流人四人口書』（前掲『長崎古今集覧』下巻、pp.211～218）、および魯西亜船より長崎護送の漂人口書（『通航一覧』巻318、8のpp.157～166）。
- (10) 大友喜作編『北門叢書』4、昭和19年、北光書房。
- (11) 註(1)参照。
- (12) 桂川甫周『北槎聞略』巻2。
- (13) 註(1)に挙げた山下恒夫はアツカ島説をとるが、仙台漂民のウスチ＝カムチャツク寄港については触れていない。
- (14) 註(4)参照。
- (15) ロシアへの漂流民漂流記中、名詞と前置詞「ナ」を一緒に覚え帰った例としては、伊勢神昌丸漂民や薩摩永寿丸漂民の「ナベリヤゴウ、磯」や「ナアベレキ、浜辺ノ事」があるのみである。
- (16) 正しくはラストロフ、複数形はラストロヴァ
- (17) ロシア里法1里を1ヴェルスタとすれば1.067km、日本の1里は3.9273km。